

30

20

JAPAN

10

8

6

4

0

30

20

JAPAN

10

8

6

4

0



柳葉文

一束の文書とひやと袖ふとひ下を

袖えとふ

但し引はれまつて平目字と云ふ下

一中身は一幅のナラの墨書きと見一丁引

本身は墨書きの上半分はうなぎの皮の下

一之海苔の墨書きと下とと袖えとひ下を

袖えとひ下を

本間文庫  
文庫 14  
A185  
4



一柳葉老之生之日風繁古方上者尤

一古事記と云ひて  
左右と云ふ  
中の事と云ふ  
も其の事と云ふ  
事と凡て云ふ

一  
事に耳を以て聞かず  
心に目を以て見ぬ者  
は人間の如く思ふべ  
し

西の秋物は専意ふれず  
あ葉の上もあらずて草木の用の  
草木多可憐也柳あと多き又生え  
み又和やかふるとしけまくらふ柳あと  
りすすき是まほ三片の柳  
一枚木はたまゆる角の黒毛の木  
歌ますひ山す月のうす葉月在山川は多  
き山も木も柳も海も多きと柳あらわす  
うつやうつ声すひ山をのぞむ

左の表

一左の蓋板のみ居前小役をやる用だ  
けんづからむよすまきまなう

一左端に立てノロソヅリモ左ノ極めと左  
井得と右やぐのねのまくす様めがりど  
以テシ小方をうけ

一焼口はねぬとわゆとよくなわと墨と  
ねねり場の先を枝メタモと以テ  
ハふをうけ

一左の左を左方へ左右ねぬとよがき  
左の右めはねぬとよがきと左端をうけ  
左もとめ左とすげる左端の左を  
左もとめ左とすげる左端の左を

一左の左を左方へ左右ねぬとよがき  
めの左めはねぬとよがきと左端を  
めの左めはねぬとよがきと左端を

一左衛門の左はせきと一めを生とひて服み  
まとうらうふせりすみけと一づき  
折り紙めのあすとまのまつまゆ  
あふみるまくまくほめのはと  
あすかの思ふねほ一あすかおはなを  
揚げ抜ぬとあすりてぬと  
ぬぬとけりまみとあふ揚とくま  
ああもく左はまうとをくわははめを  
れりわのあくまくこゆのやうはをくわ  
まくふはめとりぐれりくふゆとえ

左りうみれじ直と陽の左にむけのめ  
左左

一月行のぬ行を左の刃と月行の上端ふ  
えかくまくまく下りふ左とくげやふ  
ごとくを振りへ

一風炉も左のやまみは爐をくじみつけア  
左左

一や形以ては拂えにて柳下へとす  
むい拂は拂ひ拂ひ壁のすとまく

一太刀のまはまとる夜生室をす

とまふ所。少くも生真マサニスあり。  
大抵の事と居多めの様マタニアリ。尤  
もの事マタニアリ。又甚多す。又は  
事多き。亦多き。生真マサニス。向對マツシテを  
見る事。又甚多き。少くも事と聞かず。生真マサニス。

一叶の風夫と女が引立てておだやかに左を  
さへば涙をのさせ  
す下げまく生きるへ妻子  
は、物の跡をなめらる夫を身にひき止

一うはあふつりのとくにせすのね  
様へ不うはあうけ（又うともをも  
ほしつけともよ）

、陽炉をたぬけをあせまし陽炉のをと  
きりと内机

、えなみまは文をあたきう兩アカ文  
字をみま書あめあすそうちる丸筆山  
と一方さき大筆と一方さき山筆と  
おち号と向ふする大筆と小筆とひり  
あらじる面前一方お先一方お前もよ

、左と右と利と向かす

、左のさす握りふ生熟さむねか  
てふれす又まは字頭を白か移する海  
をのじまうな居あふ徑つことさうせ  
をすきくいじ居あふ徑ふ  
、左のさす握りふ熟さむねか  
左せ直とさすをすが  
、四方の左のとすと  
小角り

、上  
、左折向えま

、右度き左は極まつてよまゆのを

火に据ふるゝ事あり

一 火の内をひ焼とつけまつた生とて  
らきそはとつけたとあけうけの塗りけと  
まぶ焼とりづくをすくと度量もあとある  
四 唐又耳のもの焼むなり

一 やさきをまほねる事あり

一 ~~麻の茎を~~ <sup>麻の茎を</sup> 烧く事あり

一 速あひ敷

一 魚大はが <sup>小</sup> 背や刃をの方へて  
<sup>手</sup> ~~鐵~~ <sup>鐵</sup> へうそ用ひ月桂の百陀家士を

の頭より一 そ左方の身をとせ  
陽と陰のあらまちのうちの方の速  
あをとく打む ちの 堂へ氣せみをと  
みうちの方の速をとくちの章つさまと  
すぬ むかし打めうつて下ふるあり  
音をこすむうつて下ふる事二事と  
打む いじらむれを一 ちの身をとく  
陰の左の方をとく 但し速の様とおどり  
上より拂と拂ふことをうぢうぢうぢ  
ひうちの身をひうぢうぢうぢうぢうぢ

ハ神せよとおどりて古の事のがよあまき  
下の方とくに行ひて古の事がよあまき  
ことをうり、走まなだめのあす、生きをみ  
みせだましナ一叶うるの方へ片寄せ生くよ  
エ斗しゆく

、風やまほは遙生瑞の次ふらすみを生く

、  
街  
か  
者  
ま  
の  
を  
れ  
は  
ち  
ま  
の  
を  
と  
そ  
う  
さ  
ふ  
か  
の  
ま  
あ  
よ  
み  
ま  
え  
し  
う  
が  
一  
あ  
ふ  
じ  
う  
げ  
を  
れ  
の  
う  
ま  
え  
る  
の  
次  
ふ

まくわらまくわらまくわらまくわらまく  
たる方ともときよきよきよきよきよきよ

、風やのけり

、風生をとひ

、もももももももももももももももももも  
くもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

鎌毛自在の作法

一書はふをあらそむちせうきあすとお筆を  
用ひりあり

一筆手ふ田かせをまく。風や筆性はあそ  
蛭縫へ自かとけ。小猿縫のつるすと  
左かほり。蓮鷺のあゆをまかす。  
一りをふ書はまざひまくらす。一判をま  
くふりす。ねうどさくはあくわすやふ  
まゆすと。少佐のせうふ伝てまゆす

一筆手すいだもせまく。一うちの筆を無の段と  
まととくえし。筆と紙ふけりとまく。ま  
こし縫とせびニテすとどらをく縫とく。ま  
上げ書きをまきとけ。ちのむとてつると  
よよりれく。おもむく四つの様と下の様ふ  
く。本とせび。口りと見る。まちのむと  
夢とねむと。おもむと。本とせび。まちの  
もとせばと。おもむと。まちのむと。本と  
夢とまちのむと。おもむと。本とせび。まちの

裸も衣もめぐりて才と才とまともに生き

但得あの方座みればつるは鳴ふをうせ

おもひのうへどもさうすがの左目防めくと

下へ生ぐ

左は年を一陽とすけ事とすくちをも  
あゆみとてちの理とすけ左は事とめを  
あゆみとてうけ又事と左はおもむき  
をめぐるめくこと左はすけ事とめを  
をめぐるけて左は年をすけ事とめを

生えを左をきとぬめあひまと又ぬめく  
草と種とふをもととくすくけ左は年を  
少花とねら左をとくきかど下へあゆみ  
裸も衣もめぐりとすくとめとめく  
但し自れをすけやうすけ端まで自を

左一すけりとすくアドリ右同

一箇の衣紙自居すくり但し事とえ更け  
ぢうちの事とヤ能とめく種とおもむ  
あゆみとめ方へいれり才と能のあゆみ  
やうわらねくざきく

一 廣尾毛の夏はあく方とすすてこすす  
古事記すかにあすす（あく方といすす）  
りづのよ移しの往す

一本丸茎はまのを雲亂夢文首の天とぬつる  
少は四方の連浦ふは小平小丸すす  
黒形うる毛けもくらむ左せ惜な作異  
波舟つまつ船うこをさする

居城東玉山の假枕

一 四五を平言ほのせきみくまに譲つてや  
先へ向き一船うちすむるう

、白やかに一船向の方（船えむるう）

、桜のうねのうねるまに候せ何月四月をわ  
の年うねの書を左のうね（桃石左）  
君すゆくうねるまに一船右左

向くやふねりう

一 すれすれ一ルの方をもすす

風打毛やねの辺

一風打の櫻花屋の身うり  
五はひあかすえ風打の身うりへよま  
、やねの身うりはがはくまへる  
桜花やねの身うりをきぢう

一やねの身うり向うの身うり本まき  
一四葉の桜花向十身うりけ毫目桜  
白字身うり身うり身うり向うの身うり

一やねの身うり身うり身うり身うり  
身うり身うり身うり身うり身うり  
身うり身うり身うり身うり身うり  
身うり身うり身うり身うり身うり

立

一鬼風打の院左右身うり身うり身うり  
一院の左自天作身うり身うり身うり身うり

ぬかうけにまはせとて後上りゆくやう又  
左目あらわす下りゆく下りゆくす

一風車風車風車風車あの方とまはせ枕  
あめくテスミのくびきうわーがす  
風車風車はなびく宣子まくう風車は  
かみの花吹くがる方どーまく宣子

一秋風の匂ひニキニキモゲスハハ

ウタヒナヒナヒナ

国里す

一やねのへ百力すまもひまー  
一方ねすま土浦村御内村西をゆがく  
もし生くゆすま月野は猿の方へさせ  
エ内村はまゆまも生く下大野と甲ねどよ  
りりじやねの太のアヤウリ方とくづ  
、大根根玉向やねと用、揚げ方蟹は  
蟹身身の用玉セラトサレ

古者有國風  
好色之詩  
比興之用  
同於其聲

一  
春  
日  
中  
午  
時  
間  
生  
了  
病  
也  
不  
可  
以  
去  
接  
客  
所  
以  
就  
在  
家  
休  
息  
了  
自  
从  
那  
天  
后  
来  
每  
当  
有  
朋  
友  
来  
找  
他  
时  
候  
他  
都  
会  
说  
我  
病  
了  
不  
能  
见  
面  
而  
已

一 や生まざまあきけのねねよあまうり  
五 まよもたうひきまうりくう  
一 基自のねはすまうめくねせうま  
叶ひはまくね

一 長ねはせとみ移と生きね立な  
シテアキニツミキとニサマセテ  
めく猪の子を移のほかをまくねえさ  
はすす

一 老自向ぬまゆね三るす見せとみ移

とりうきまゆくうかくう先に  
ぬまじ

一 稲ぬき疏ぬれの處は丁度多手多用

一 井花子み序を海井土用のやす方  
を用

一 云萬葉子少筆多手多用好は生

よとくう

一 ね浪行草風序を本丸用がり  
利形相は宗旦ぬみ乃の店と用ひます行ふ  
すくは

サニ向ひ所仕のは紙がつまつて何事  
が主器と申す

### 炭斗の事

一 炭は口や手に持てまゝの物を用ひて  
二 烟取の老人の用ひるは右左のちたと  
三 烟のつまみ器と申すより安樂事<sup>アラル</sup>有  
ありてすゞし成は年頃の物も勿被原

一 草庵は昔まよふ有へ毛利とて宣  
一 宮之な相好はは餘自不<sup>シ</sup>か私  
一 五毛ひ毛利と申げてあと食す草庵は  
一 有りて毛利と申げて毛利方一竹。  
一 まの後毛利の通称もと申ゆる草庵  
一 底もまよふ有りて毛利と申ゆる草庵

折りたまにあらわす事多きが故に  
其の如きはいづれも岸に近い  
所にててゐる。左の如きは  
右の如きと並んで、そのうち  
四年の暮春には二月づからと  
いふ。左の如きは、その年  
の秋の初めに於て、右の如き  
はその年の冬の初めに於て  
書かれたものである。

年の事多言ひ乍りと云ふ  
一在主體殊は在主海の松香板  
一小紀七十二年  
主無事御所三百石近を有す  
不見る如きを主裏の御角  
主外に主事上仰す法國机  
佛坐す所以自と左と右と下と上と有す  
右の事記しらむ  
打合に主事あつせぬふ  
新自とあらかじめ

博すよお叶はたとくとをひく □ ある  
てり一打五十九章ふりせてもよもんめ  
十口とぞち □ 之をふきく折目岩山ア  
と鶴の二フさる。左角好左のあかこは  
けふ音子なり。左生氣ゆふ仄地神と  
生右ひきの左向れ左とすある月、  
一唐あ萬のゆめの左生は争り。左角へ  
サ生さる左生は。左生氣ゆふ角を  
考へばは左生は。左生氣ゆ  
ます(?)

一鳥よ頭組改柳て舟のうめみづる。  
三手相三手すり生く詰重るのよう  
りうた舟は万の生すり生く若自  
内ねうすり生く(?)  
一風大河半危や以よよたをな左生  
みづく(?)

